

第1章

古城のデッサン



城だ。

それはどう見てもお城だった。

国産品ではない。中世ヨーロッパの古城——って、中世って何世紀ごろのことを指すんだったか、ちゃんと覚えていない。ヨーロッパの、あるいはヨーロッパ風のお城といっても、時代や地域によっていろいろ形式が違うのだろう。

昼下がりの銀行のロビーである。〈昼下がり〉というのは、そう表現できるくらいの午後の半端な時間帯だという意味であって、この表現が持つ〈長閑な^{のどか}〉あるいは〈気怠い^{けだる}〉雰囲気の方はあてはまらない。

げんなりするほど混んでいる。

今日は二月の二十日。いわゆる五十日^{ことおび}だ。しかも金曜日である。一年のうち、二月と八月は経済活動が低下するとかで、商売人はこれをニツパチ枯れという。それでも週末の五十日の銀行は、こんな首都圏の一角の何ということもないベッドタウンの銀行であつても、

きっちり混雑するのだ。客用の椅子は満席で、各種の書類を記入するカウンターのまわりにまで、順番待ちの人たちが所在なげに佇^{たず}んでいる。ロビーの右手のATMコーナーにも長い行列ができていて、案内係の女性が頻繁に「こちらが空きました、どうぞ」「お待ちせして申し訳ありません」などと声を張りあげている。

^{おがきん}尾垣真は、手にした薄っぺらい番号カードを見た。一四九番だ。カードというよりレシートみたいな頼りない紙だが、そこに印刷されている番号は厳然たる事実を示している。五つある窓口は全部開いていて、フル回転しているにもかかわらず、表示されている番号——現在受付処理中の番号は一一三一番。まだまだ待たねばならぬという事実である。

順番待ちの人たちはみんな居心地悪そうで、ちよつと苛^{いら}ついているか、疲れていて眠そうだ。半分方はマスクを付けている。そういえばインフルエンザの流行はまだ収まらない。ほんの一週間ほど前だったら、真は自分の立場を盾にして、こんな状況下の銀行には絶対に近寄らずにいられるはずだった。

ボクは受験生です、と。風邪やインフルのばい菌やウイルスがうようよしてるに決まってる人混みのなかなんか、行くもんか。大事な一人息子の受験生を、そんな場所へ使いに行かせる親がいるもんか、と。

しかし、今の真は受験生ではない。なくなった。先週、第一志望の県立高校への推薦入学が決まったからである。

ポスト受験生。郵便受けのあのポストではなく、〈ポストプロダクション〉とかの方の、あのポスト。

それはどういう存在であるか。

暇である。

真の通^{かよ}っている花^{はな}田市立第三中学校からは、第一志望では県立高校を目指す生徒が圧倒的に多い。私立受験組は全体の二〇パーセント程度だし、県立の推薦枠に入る生徒はもっと少ない。

つまり、クラスメイトたちの大半は、まだ受験生だ。最終コーナーを回ってゴールが見えてきているところで、そのゴールへどういう形で駆け込むことができるか、息を詰めて勝負をかけているタイミングである。これからが本番なのだ。

学校の方も臨戦態勢だ。短縮授業が多いし、授業があっても自習になるか、ぎりぎりの念押しと度胸試しを兼ねて、県立高校受験者向けの模擬試験（いわゆる過去問というやつだ）をやるか。

だから、ポスト受験生は暇になる。学校にいてもやることがない。今日も、午後からの授業は二つとも自習だというから、給食だけ食べて早退^{はやび}けしてきてしまった。

「暇なら手伝ってちょうだい」

というのは、尾垣正子^{まこと}——真の母さんだ。

「家庭内バイトのつもりで働いてよ」

真の両親は小さなカレーショップを営んでいる。フランチャイズのカレー店ではない。自前、オリジナルのカレー料理を出す店だ。カレーライス専門店ではなく、ドリアとかグラタンとかも出すが、メインはカレー料理なのでカレーショップとしか言いようがない。そういう店だ。

これが繁盛している。稼ぎ時のランチタイムには、夫婦二人では手が回りきらないほどだ。五年前、父・富夫が勤めていた食品加工会社の早期退職勧奨制度に乗っかって脱サラし、始めた店だった。店名は「パイナップル」という。但し、店を出すカレーにパイナップルは入っていない。甘味はカレー料理の隠し味として大事なもののだが、富夫はチョコレートもフルーツも嫌って使わない。黒糖を入れている。

で、身びいきを抜きにして、何を食ってもけっこう旨い。富夫は、まずは脱サラ勝ち組の人生だと言っている。

さて、今日も「パイナップル」は忙しい。カウンターとボックス席を合わせて十二人しか入らない店に、外まで行列ができていた。そこへ早退けしてきた真が帰宅したので、さっそく手伝いを命じられた。

仕方がない。家業だ。真は黙々とウェイター役をした。皿洗いもした。午後二時までのランチタイムの客足が一段落してほっとして、富夫が賄い飯のオムライスをつくり始めた

と思つたら、レジにいて何やら書類をいじつていた正子が大きな声をあげた。

「これ、今日が振込期限だった！ 真、銀行へ行つてきて。ちゃんとした振込票の控えがほしいから、ATMじゃなくて窓口で払つてね」

請求書を二、三枚、真の目の前に突きつける。自分で行つてよと言ひ返そうとしたら、ドアが開いて新しいお客が入つてきた。若い女性の二人組である。常連のお客さんで、いつも制服姿だから、どこか近所にある会社に勤めているのだろう。そのうちの一人が真のタイプで——なんて中坊が言うのも生意気だけれど、とにかく笑顔が可愛くて性格よさそうなお姉さんなので、そのヒトの前で口を尖らせて母親に反抗している姿を見せたくはなくて。

結果、真は銀行にいる。

今やっと、一三八番が呼ばれた。さつきから右端の窓口をひとつ、一人のお客が占領したきり動かない。窓口係の女性だけでなく、奥から年配の男性も出てきて、二人がかりで応対している。

椅子にあぶれた順番待ちの人びとは、何となく互いに互いが煙たいような、視線を合わせてはいけなような顔をして、それぞれあさつての方向を眺めている。真もそうしていた。立ったままでは雑誌も読めないし、そもそもこれだけ混み合っていると、ロビーの雑誌はあらかた出払っている。

——こういうとき、ケータイがあると暇つぶしになるんだろうなあ。

実際、ロビーにいる人たちはてんで携帯電話をいじっている。真のすぐそばの椅子に座っているサラリーマン風の若者は、さっきからメールを打ったり受けたりを繰り返している。

高校生になったら、携帯電話を買ってあげる。中学生のうちは駄目。志望校に（しつこく言うが推薦で）受かったとしても、中学を卒業するまでは、駄目。母・正子の最高裁判決である。卒業式まで、あと一ヵ月ぐらいはお預けだ。

暇だ。ホント暇だ。誰とも目が合わないように、あさつての方向ばかり見ているというのも疲れる——

という状況で、それが目に入ったのだ。

このロビーには、折々に様々な展示物が飾られる。（町の皆様のコミュニケーションスポット）というのがこの支店のキャッチフレーズだからかもしれない。近所の団地の写真愛好会が撮った風景写真とか、地元の小学生の描いたお父さんお母さんの絵とかを、ロビーの端に立てた大きなパネルに展示するのだ。

今日は本当に混み合っているから、ついさっきまでは、パネルの前にも三、四人の人が立っていた。真がいるところからは、椅子の列を挟んで二メートルほど離れているだけなのだが、そっちに目をやると、そんなつもりがなくても、パネルの前に立っている人たち

の顔をじろじろ見ているみたいなのが、できるだけ視線をそらしていた。

それが今、続けて二人の人がどいたので、視界が開けて、何となく目が向いた。

現在の展示物は、幼い子供たちが描いたカラフルな絵だ。縦に三列、横に五列、きちんと並べて貼り出しており、パネルの上の部分には、銀行の誰かが書いたのだろう、丸っこい字でこうタイトルが記してあった。

〈ぼくのうち わたしのうち〉

彩りは鮮やかできれいだけれど、幼い筆致の絵ばかりだ。クレヨンを使った、タイトルどおりの〈おうち〉の絵。形も大きさも様々だ。二階家もあればビルもある。マンションってことだろう。一階部分が店舗になっている絵もある。この作者の子は真と同じく、商売をしている家の子供なのだ。

そうした可愛らしい絵のなかに、一枚だけ場違いな絵が交じっていた。

正確に言うと、縦に三列横に五列のなかに交じっているわけではない。絵の列の向かって右下に、あとから慌てて足したみたいにくさがついている。だから、その絵の下半分はパネルからはみ出してしまっていた。

さらにその絵は、一見しただけで、他の十五枚の絵とはまったく違っていた。

まず、色がない。エンピツ描きののだろうか。デッサンというやつか。
そして上手い。

これだけは、大人が描いた絵だ。誰が見たってそう思うだろう。担任の先生の絵なのか。だとすればその先生は、お城に住んでいるということになるわけだが。

新しい番号が呼ばれて、パネルの前から、また一人どいてくれた。真は椅子の横を通ってパネルに近づいた。

そう。これは城だ。屋敷とか邸宅のレベルじゃない。規模も構えも違う。対になった尖塔を戴き、その中央にはドーム。ドームのまわりには彫刻が飾つてあるようだ。尖塔の両脇には三角屋根が二つ。窓は優美なアーチ形だ。手前にあるのはバルコニーだろうか。

城の下半分ぐらいは描かれていない。こんもりとした森に囲まれて、見えないのだ。お城に比べて森の描き方はあつさりしていて、さつとエンピツを走らせてあるだけだが、木立の葉が生い茂る、緑濃い森である感じがよく表現されている。

子供たちの絵には、すべて作者の名前が書いてある。〈あおきまどか〉へかんのしょうた。たどたどしい字だ。だが、この場違いなお城のデッサンだけは、名前がない。

それに、子供たちの絵はみんな画用紙に描かれているのに、このデッサンだけはスケッチブックが使われている。スパイラル式というのだろうか、ぐるぐる巻きの金具みたいなもので束ねてあるタイプのやつだ。描いてから、そのページだけ破って外したのか。破って外してから描いたのか。長方形の上の辺に、紙のぎざぎざした部分が残っている。サイズも、画用紙よりひとまわり小ぶりだ。

子供たちの作品は、裏側に両面テープか何かを付けて、パネルに貼ってあるのだろう。

だがお城のデッサンは、ぞんざいな感じにセロハンテープでとめてある。それも上辺の真ん中の一カ所を、一センチあまりのセロハンテープでくっつけてあるだけだ。真っ直ぐ留まってないので、やや左下がりになっていた。

それにしても、きれいなデッサンだ。

真は指先でそつと、お城の尖塔の部分に触れてみた。粉っぽいような感触がして、尖塔の輪郭を描いた線がちよつと滲^{にじ}んだみたいになった。指を見ると、うっすらと黒い粉がくっついていた。

申し訳ないことをした気がする。

——何だろう、この絵。

明らかに、ひとつだけ仲間外れだ。子供たちの絵のパネル展の端っこに、ぼつんとぶらさがっている。まるで、誰かがこっそりまぎれこませたみたいだ。うん、そうだ。担任の先生の作品であるという仮説は撤回。先生の絵なら、子供たちと同じ画用紙で描くだろうし、同じように丁寧^{ていねい}に貼り出されるだろう。

誰か。ここに勤めている銀行員？ あるいは利用客か。絵を描くことが好きで、腕に覚えもある。自分の作品を他人^{ひと}に見てもらいたい。そこで〈ほくのうち わたしのうち〉展示に便乗することにした。こっそりまぎれこませるから、あんな雑な貼り方になった——

「お待たせいたしました。一四九番のお客様、三番の窓口へどうぞ」

真の順番だ。慌てて三番窓口に行く。振込先は三件あって、みんな端数がついたややつこしい数字だ。窓口係の女性がてきぱきと計算してくれて、真は預かってきた封筒からお金を出す。

手続きが終わるまで、二分かそこらだったろう。封筒とおつりをバーカーのポケットに突っ込み、真はカウンターを離れた。窓口が閉まる午後三時が近づき、店内も少しは空いてきたようだと思ったら、自動ドアが開いてまた何人か入ってきた。

——え？

パネルから、あのお城のデッサンが消えていた。

パネルの前には、また人が立っている。その人の前を通り抜けてゆく人もいる。

椅子の脇を回り込むようにして、真はパネルのそばに戻った。ズボンの膝のあたりが、椅子に座って脚を組んでいた若い女性の靴にあたり、女性がさも嫌そうな顔をして真を睨んだ。その反応、逆だと思うんですけど。

なんてことはどうでもいい。あの絵、どこへ行った？

きよろきよろ見回し、パネルの裏側も覗き込んでみる。ない。何でないんだ？

そして、見つけた。パネルの脇に並んでいる、書類記入用のカウンターの足元に落ちていた。何であんなところに？ パネルから剥がれ落ちて、床を滑っていったのか。

——あ、ボクのせいかも。

番号を呼ばれてパネルのそばを離れるとき、袖^{そで}か肘^{ひじ}で触っちゃったのかもしれない。いや、呼ばれたとき、紙の端っこを指で触っていたような覚えもある。どっちにしろ、短いセロハンテープでいい加減に貼ってあったものだから、真が動いたはずみで落ちてしまったのではないか。

拾おうと、足を踏み出した。ちょうどそのとき、真の反対側から、背広姿にコートを引っかけた大柄な男性が、アタッシェケースを提^ひげてカウンターの前にやってきた。窓口が閉まる前の駆け込みで、急いでいる。

で、その男の靴が、まともにあのデッサンを踏んづけた。

足元に何があるか、まるで気にしていない。気づいてもいない。だから、真上からど真ん中を踏んだ。よく磨き込まれた黒い革靴。爪^{つま}先の尖^{とま}ったお洒^{しや}落^れなデザインだ。

アタッシェケースをカウンターに載せ、蓋^{ふた}を開け、中から書類を取り出し、それを横目に見ながら、男は窓口用の書類を書いている。殴^うり書き。横顔だけでも、不機嫌そうなのがわかる。このクソ忙しいのに、何で俺がこんな雑用をしなきゃならねえんだよ。

気持ちにはわかるけれど、もしもしおじさん、あなた、絵を踏んでます。

男が書類を書き終えた。アタッシェケースを閉め、身体の向きを変えてカウンターを離れる。やっぱり急いでいる。

恐れていたことが起こった。男が勢いよく歩き出したので、ただ絵を踏んづけるだけでなく、踏みにじる形になった。

男の靴底から離れたあのお城のデッサンは、ふわりと位置を変えて、三〇センチほど真の方に近づいた。

半分口を開けて、真はしゃがんで絵を拾い上げた。

見事な靴底の跡がついている。踏みにじられたところに皺よが寄り、線が歪ゆがんでしまっている。せっかくきれいなデッサンだったのに、台無しだ。

手にしてみても、わかった。この絵をパネルに貼りつけていたセロハンテープは、短い上に粘着力が弱っている。触れてみると、ほとんどぺたぺたしない。これじゃ、元通りにくつつくかどうか。

——ていうか、くつつけていいのかな。

そもそも、これは正規の展示物ではなさそうなのだ。

どうしよう。案内係の人に渡そうか。これ、落ちてましたよ。

それはいいのだが、靴底の跡のことを訊きかれたらどうしようか。君が踏んだの？ 君がこの絵を汚したの？

まあ、そこまで詰問的に訊かれることはなからうが、何だか後ろめたいじゃないか。踏んづけたのはボクじゃないのに。

また、新しい客がカウンターに近づいてきた。派手な身形のおばさんだ。案内係が付き添って、忙しげに何かやりとりしている。

「こちらの伝票にです、ご記入いただきたいのですが」

「いちいち書かないと駄目なの？　なんで機械でできないのよ」

「申し訳ありません。規則です」

三分の二秒、善後策を考えた。残りの三分の一秒で、真は行動した。拾ったデッサンをパーカーのポケットに突っ込んだのだ。預かってきた請求書とお金の入った封筒を突っ込んだのとは反対側のポケットに。

そして立ち上がると、足早にロビーから外に出た。銀行の脇には一方通行の道があり、それを渡ると美容院があつて立ち食いそば屋がある。

その前で足を止め、おそろおそろポケットから取り出してみた。

美しいお城のデッサンは、今度こそくしゃくしゃになっていた。

助けるつもりだったのに。

真はこっそり、肩越しに後ろを振り返った。事實はまったくそんなことではないのに、万引きしてきたみたいな気がするのとは何故だろう。

立ち食いそば屋の自動ドアが開き、蕎麦つゆの甘い匂いが漂ってきた。